レ無ニ別心一は上、洛尤之由、内府様御内證之由に候迚、無ニ御等閑一候者、讒人申成有様に被ニ仰聞一、急度御糺明候而社、御懇切之驗たるべき處に、無ニ意趣一逆心と申唱候條、無ニ別心一者、上洛仕候へなどと、乳呑子のあひしらひ不レ及ニ是非一候。昨日迄企ニ逆心一候者も、其儀はづれ候へば、しらぬ顔にて上洛仕り、或は緣邊、或は新知行を取、恥不足をも不レ顧人之交と存じ候。當世風には、景勝身上不相應に候。心中無ニ別儀一候へ共、逆心天下に無ニ其隱一候者、むざと上洛、累代律儀弓箭之覺迄失ひ候條、讒人被ニ引合一、被ニ御糺明一候者、上洛罷成間敷候。右之趣、景勝理か非か。不レ可レ過ニ尊慮一候。就中、景勝家中藤田能登守と申す者、去月半に當國を引取り、江戸へ罷移り、其より上洛仕候由に候條、萬事しれ可レ申候。景勝取違候か。内府様御表裏か。世上之取沙汰次第之事。

一、千言萬句も不レ入、景勝別心毛頭無レ之候。上洛之儀者、不ニ罷成一候樣に、御仕懸候之條、不レ及ニ是非一候。此上も、内府様御分別次第、上洛可レ被レ仕候。縱此儘、在國被レ申共、遠國に居候共、太閤樣御置目を相背、數通之起請文反古に成、御幼少之秀賴樣を見放し被レ申、内府樣へ無ニ首尾一被レ仕、此方より手出し被レ致候而は、天下之主になられんも、惡之名不レ遁候而、末代之可爲ニ恥辱一候。此處無ニ遠慮一、何物を可レ仕候哉。可レ被ニ御心安一候。但讒人之申成、實儀に被ニ思召一、無ニ御改一、猶不義之御拘者不レ及ニ是非一候條、誓紙堅約も入間敷候事。

一、猶其許、景勝逆心と申成候とて、於ニ隣國一も、會津働にて觸廻り、或城々に人數を入、兵糧迄支度、或境目取ニ人質一、所々之口留を仕、樣々令ニ雜說一候へ共、無分別者之仕事に候間、聞も不レ入事。

一、内々、内府へ使者を以成共、御見廻可ニ申述一候へ共、隣國より讒人打詰、種々申成、家中より藤田引切候條、逆心歷然と思召候所へ、御音信など被ニ申上一候者、表裏者第一と御沙汰可レ有レ之條、先條々無ニ御糺明一内は、被ニ罷上一間敷由に候。全無ニ疎意一之通、折節御取成、於ニ我等一も可ニ畏入一候事。

一、何事も乍ニ遠國一推量仕儀候間、有樣に可レ被ニ仰越一候。當世樣々餘情箇間敷事に候へ共、自然實事も、うその樣に可ニ罷成一候。申迄無レ之候へ共、被レ懸ニ御目一候儀と云ひ、天下黑白を御存知の儀に候間、被ニ仰越一候儀は、實儀と可レ存候。御心安さのまゝ、むざと書進

上候。慮外不レ少候へ共、愚意を申演爲レ宜レ得ニ尊意一、不レ顧ニ其憚一者也。侍者奏達。恐惶敬白。

慶長五
卯月十四日

豐光寺侍者
御中

直江山城守景綱

伊達正宗、白石城を取る事

遠境近隣ともに、景勝逆心なりとの風説頻りなるに、藤田能登守立退き、栗田刑部は、殺されければ、彌〻逆意實事となる。然るに、會津領白石城は、景勝の士大將甘數(糟)備後守是に居る。是伊達筋の抑なり。備後守妻、若松に於て病死す。備後守、之を聞き、忍びて若松へ行き、城の留守本丸をば、家老豐野に預け、二廓をば備後守弟甘數(糟)彌三に預けて、會津へ行く。此彌三、元來癩病氣なる故、武道は甲斐々々しけれども、景勝公へも出ずして、備後守手前に差置き、我が内の騎馬士同前に仕る故、彌三、常に不足に思ふ所に、此度、留守本丸を豐野に預け、彌三に二の廓を預け候故、一入恨を含み候。伊達正宗、其事を聞きて、彌三方へ計策せらるる故、彌三、早速同心し、白石城へ正宗衆を引入れ、豐野を初め、城兵殘らず討つて、正宗へ城を渡すなり。景勝公、聞召され仰出さるゝは、大事の抑の城を預り、我が女房の死にたりとて、忍びて來る事、掟を背き不屆の至なり。斷を申越し候はゞ、加勢を遣し、備後守、當地へ參る樣にもすべきを、我が悲歎にひかれて、掟を忘れ申す事、沙汰の限なり。士は本心を動かさず、難きに逢ひても憂ひず、喜來りても奢らず、古語にも隨レ流認ニ得性一、無レ喜恐無レ憂とこそあれ。臨濟宗は、松を指して蒼管の觀念と云ひ、心を磨き身を嗜むは是なり。備後守、本心を失ふ者なれば、賴少き間、切腹申付くべきなれども、忠功ある久しき者なり。其上、正宗に城を取らるゝ故、世間へ申分に、備後を成敗仕りたりとあれば、正宗を相手がましく、某に不似合なり。然れば命は助くると仰出され、閉門仕る。備後守、慮らず命を助かり、有難き事ながら、一入難儀仕り、閉門仕りて罷在る内にも、白石を取返すべきとの思案工夫、二六時中懈なく候。

附甘數彌三は、近年まで伊達家に存生、僞なき事なり。

瀬上合戦、伊達正宗敗軍の事

正宗、白石城を取り、其競を以て、會津領福島城を攻め取るべしとて、一萬五千の人數にて、三月下旬、白石を立ちて桑折へ懸り陣取り、廿六日備を出し、瀬の上へ川を越し、瀬の上の在家へ取付き、松川を隔てゝ備を立つる。一萬五千の内、五千は手分して、梁川の城須田大炊助を抑へ、殘る一萬を三つに分くる。一の先片倉小十郎、二の先伊達安房守、三は正宗旗本なり。福島城主本城豐後守並に加勢會津先方永井善左衛門・齋野道二（後伊豆守と號す。是甲州家の小田切所左衛門と申したる士なり）・岡左内（後越後と號す。）・青木新兵衛（後方齋と號す。）・栗生半左衛門・岩中（井イ）備中守等、福島城より備を出し、松川を前に當てゝ備ふ。豐後守は、城内に一戰を以て罄ふる。（口傳。）敵味方、松川を隔てゝ相對す。味方より斥候として、猪保主膳（能登が遠類）が出づる。是は小田原家の牢人、二三度も能き譽仕りたる士なり。歸り來りて申す。敵は川を越すまじく候。是まで働きたるを勝利にして引取る時、此方より跡を慕ひ、川を越し候はゞ、備を立直し、此方の人數、川を越し切らざる所を、討取るべきと存ずる樣子に相見え候と申す。豐後守、念の入りたる將なる故、重ねて井筒小隼人（女之助が伯父なりといふ老功の士に、本城團右衛門といふ中老の士を添へ兩人、斥候に遣す所、兩人歸りて申すは、敵は半時の中には川を越し、懸るべしと見え候と、主膳が見樣と、各別に申す。最前、主膳が見樣は、河を越すべく候はゞ、馬の沓を外し障泥を解き、歩者は足拵、馬乘は其支度あるべきに、其樣子一圓見えず。扨又、退く色を見せて、此方を引請くべき樣子と考へ候事は、小荷駄雜人を、跡の瀬の方へ繰下げながら、本備は進む體なり。是は雜人小荷駄を繰下ぐる樣子を、此方見て慕ひ候はゞ、取つて返し、一戰を遂ぐべしと存じ、只今の場にては備の間遠し。流石の上杉勢、悉く川を越切り、手早に備を立堅め候はゞ、六づかしきと存じ、中途を討つべき爲めに、本備をば進め候と存じ候と、主膳申し候。井筒小隼人・本城團右衛門見樣は、川越人馬の支度は、大底の積事、馴れざる敵の儀なり。伊達家代々、弓矢を取り、正宗其事に逢ふ大將なれば、川越の體を見せば、敵も積るべしと心得、前方に支度せず、川越の事に臨みて、少しの内にもなる事なり。又小荷駄雜人を繰り下げ候は、引取るべきにはあらず、自然敗軍の時、小荷駄へ崩れ懸れば、混亂して小荷駄を奪はれては、一日の陣もなり難し。役にもたゝぬ雜人は、川越の時、歩者多ければ、かせになる故に、小荷駄に付け

て繰下ぐる。小荷駄僅に二百計り、程近く出陣故、陣具用意道具計り、此内百計り殘して、其外は早く繰下げたり。是は四半時の内には、繰下ぐべし。其内に、そろ〳〵と備を近寄せ、皆繰下ぐると、無二に切り懸るべし。其時、川端にて人馬の拵、旁あるべきを以て、半時の内と積り候、殊に正宗、此方の備を見ると、其儘引取るべき正宗にはあらず候と兩人申す。此見樣道理尤もなりと決定して、味方の先衆、川端より七八町間を置きて、甘く遠け、備配能く定めて之を待つ。正宗大軍の故なり。案の如く伊達衆一備、先づ手分して、其日の巳の刻計りに、河を越えて押し來る。半の岸へ打上る時節、味方靜に太鼓を打つて進みて、間一町程になりて、場固の凱を作りて、一同に突懸る。流石の正宗衆なれば、是を事ともせず、一手限に槍を初めて相戰ふ。味方、二の手を以て、敵の先片倉が備を入崩す。敵の二の手武功の士、侍大將の伊達安房守に向つて申すは、味方、先手の片倉崩るゝを見捨てゝ、何とて懸り給はぬぞと諫む。安房守曰く、此所の勝利は、各〻存ずまじとて、備を纏め、逃ぐる片倉勢には構はずして、福島勢の後へ押廻す。之を見て、味方衆いひけるは、敵、後を切るべき樣子なりとて、諸卒を下知して追ひ留む。其法正しけれども、敵を追ひ亂したる味方を繰る故、少々むらむらなる樣子なり。敵、之を見切りて、安房守と正宗の旗本を以て、兩脇後より切懸る。されども鬪ひ亂れたれども。其法は亂れずして、雌雄互に地を易ふる所に、片倉又亂れたる人數をまとめ、守返して切り懸る故、味方、桑の木原の方へ引色になるを以て、敵、彌〻競ひ進む。其時、本城豐後守旗本を以て、信夫山の方へ備を廻し、敵の右へ突いて懸る。亂れ散りて相戰ふ敵の中へ、味方の新手懸る故、正宗衆の備亦騷ぐ。是にても勝利を得べきなるに、又梁川の城主須田大炊頭並に横田大學築地修理、或は車丹波守等、各〻梁川の加勢に罷在り。此車丹波は、元來佐竹譜第なるが、當分少の不足ありて、牢人して、此節景勝公の下へ來り居る故、斯くの如し。さる程に、須田、采拜を取りて、あぶくま川を越えし正宗衆の押勢へ切り懸る。梁川衆、河の案内はよく知りたり、須田旗本と車丹波守が備と二手になり、川の上下より打ち入る。敵は一所を肝要と相支へたる所に、斯くの如き樣子を見て、俄に備を分けたがり、備少しく色めく所を、味方、猶豫なく川を押上り懸るを以て、押勢敗軍するを、梁川衆追擊して、正宗の陣屋まで附入にして、悉く打破り、小荷駄雜具まで奪ひ取る。此時、正宗の紋、竹の丸に飛雀の付きたる外幕・内幕まで奪ひ取りて、上杉家に今に所持す。さて須田大

炊、敵を切崩し候と其儘、早打を以て、福島表へ申越す。切崩されたる押勢も、正宗の旗本へ逃げ來る故、敵も味方も早此樣子を知る事、瀨の上一戰の半なり。就中、梁川表にて、須田大炊勝利を得、此表へ助け來ると、味方の雜人に、聲々に呼ばはらせ候故、旁以て、正宗衆備を立直す事ならずして、大崩仕るを追討つて、齋野道二眞先に進みて、逃る敵の正中へ乘入れ、正宗を後より切先はづれに、二刀まで正宗の猩々皮の羽織を切さく。されども、正宗、逸物の能き馬に乘り給ふ故、逃げ延びられ、討留めざる事無念なりと、道二申し候。道二詞を懸け、正宗と見えたり。蓬し返せよと呼ばはる。流石の正宗なれば、駈足の馬を留めて申さるは、斯樣の所にて返すものにてはなし。以來の功にいたせ若者と、散々惡口し、又駒を進めて逃げ候。右瀨上合戰、正宗衆を討取る數、總手合せて千二百餘、雜兵共に斯くの如し。其外、河に溺れ死するもの數知れず。味方も尤も討死多し。此後、正宗、上杉の持へ、兵を出されず候。

附景勝公、小身になり給ひて後、右の道二、上杉家を浪人仕る時、正宗より召抱えらるべしとの事なれども、先年慮外を仕りたる某にて候へば、參るまじとて出でず候は、自然酒後などに此事を申出し、成敗せらるべきかとて、斯くの如し。然る內に、蒲生秀行、宇津宮より、又會津六十萬石にて入部故、道二を初め各、歸參仕る。其後、加州中納言殿へ、道二出で仕へて、大坂御陣迄、首尾能く勤め候。齋野伊豆守事なり。右の段々、齋野伊豆・岡左門（內カ）等、切々夏目舍人に物語仕られ候。舍人は浪人已後、此陣へ罷出候はず、在鄕に引籠り居候所、藤田・上泉廻文を以て、浪人を抱へ集むる砌、舍人方へ、上泉狀を差越し、參り候へと申す。元來知人なる故なり。されども、斯樣の時は、藤田手へこそ參るべき事なれと申して參られず。二本松の小國但馬、舍人に入魂故、之を賴み居り候故なり。

附岡越後・齋野伊豆物語の外にも、古傍輩の會津衆の話を委しく聞き候に、相違なく候。

景勝公、石田と隱謀示合す事

第一、石田、上方に於て逆謀の色を顯し候はゞ國々より內通の各、打つて出で、家康と取合を初むべし。景勝、其を聞きて兵を發し、奧筋を打つて、上方と首尾を合すべきか。然らば、仙臺の正宗・出羽の最上・越後の堀、是三人は、隣競にて大身なりと雖も、三人ともに、景勝、物の

數とも思はれず候は、

一に、堀久太郎は、昨今の若將にて、弓矢の術を知らず、家法正しからずして、二三にわれ、殊に上方風にて、押懸け強く、後道弱く、新仕置にあきはて、古主上杉家を幕ひ、取立てられたる太閤の御厚恩を忘れて、家康へ一味仕る不義の兵なれば、之を蹈潰すに、手間入るまじきなり。

二に、伊達正宗は、久しき家と雖も、父輝宗より二代、境爭・坪弓箭をも賢く取り、正宗一身の覺悟無類にて、能き大將なりと雖も、前代の惡風儀になれ、我が儘を仕りたる士共、當時の新仕置を迷惑がり、手荒き正宗なりと、心に疎み身を罄へ、家中思合はず候。大敵と雖も、上杉家にたくらべ候へば、小身なり。七手組の頭、一兩備押向ひ候はゞ、正宗、手を出す事なるまじく候。殊に正宗、心の取遣(置イ)に、弓箭正道、誠の吟味も入れず、唯〻其時節に任せ、敵にもなり、味方にもなり、我が家を恙なく、相續の所至功なりとの奥意なれば、此方、少しも強みあらば、頓て手の裏を返し、當方へ賴み從ふべきなり。

三に、出羽の最上は、數代相續の家なれども、弓箭に然と譽之れなき故、身に付く火を拂ふ計りにて、他國遠國へ取懸る武道の蟠なく、物毎に威高に計り仕なし、武功譽の者ありと雖も、新參譜第筋にても、小身なれば、家老出頭人の前にては、頭を擧げさせぬ故、十の事を、三四いふと雖も、自ら威に押され、一言のつまづきにも、善惡の批判、言少く手短に計りいはんと仕り、其理聞えかね、四つの内、三つは皆たは言となり、一つの理も、なま聞えなれば、其人不合點者にも取なす故、以來は控へてものいはず、或は又如何程能き者にても、口不調法なれば、面出(つらだ)しも成らぬ故、下の理、上へ達せず。新參にても大身なれば、譜第を押退け、上座をして、我意を振舞ひ、本より古參にて大身なれば、心は鈍にても、我儘に口を聞く。執權斯くの如きの國法なれば、軍法も未練ならん。左あれば、又上杉家に對せば、手に立つ事にてはなし。右の通なれば、石田、上方にて兵を起し候はゞ、景勝は、奥北國を討靡くるか。さなくば、右大身の三家へ押を置き、家康の持つ關東へ働き出で給はゞ、常陸の佐竹を初め、當方へ志の衆、東國にも多ければ、攻め上り、家康を取挾んで、一戰を遂げば、勝利を得べきなり。

第二、 會津に於て、先立て別心の色を顯さば、家康、早々馬を向けらるべく候。左候はゞ、其

跡より石田兵を催し切つて出で、是亦前後より押包んで、勝利を得べきなり。

右の二樣、石田より差圖之れある筈に定められ、陰符の相圖。然る所に上方に於て、石田、先立て兵を發し候はゞ、手もなく家康公蹈潰さるべき間、家康公、會津發向の跡より打つて出づべしと積りて、東國・北國へ、陰狀を認め、賴もしき士を飛脚に仕り、其狀を切裂き、笠の紐に仕らせ差下し、會津へ到來す。是に因りて景勝公、直江山城守に仰付けられ、最上へ働き出づる。上泉主水を先手とし、二萬三千の著到にて、中山或は上の山、或は長谷堂を右に見て、味方地を押廻し、先づ一番に、最上領旗屋へ押寄せ、只一時に攻落す。城主江口五郎兵衞と、志賀五左衞門之を討取り、直江、旗屋へ入替り、軍神の血祭を仕り之を祝ふ。

附　此五左衞門は、會戰氏鄕士なり。後に秀行へ歸參す。

權現樣會津御進發、關西凶徒蜂起を聞きて、師を江戸に班し給ふ事

景勝、石田御一味の儀、穩便ならざれども、表向へ顯はれぬ內は、權現樣御內談計りにて、伏見に御座なされ候所、直江山城守、最上へ働くの由を聞き給ひ、景勝御退治として御進發。大手白川表は、權現樣・台德君、其外仙道口・信夫口・米澤口・津川口、夫々御手分仰付けられ、慶長五年六月十六日、權現樣伏見御出馬なり。伏見御城御留守松平主殿頭・鳥居彥右衞門尉・內藤彌次右衞門・松平五左衞門・佐野十右衞門を殘し置かる。然る所、石田治部少輔三成、權現樣關東御下向の迹より、居城江州佐和山より打つて出で、濃州大垣城へ移り居る。越前敦賀城主大谷刑部少輔、權現樣景勝公へ日頃親し。其仔細は、大谷母は朝日といひて、太閤御內證出頭の女なれば、御奧方の儀は、諸大名衆、此朝日を賴まる。就中、權現樣・景勝公、此女へ御懇意、表向外の奏者をば、大谷へ御賴あり。然れば權現樣、景勝御退治として、會津御發向の由を聞いて、大谷其頃、癩病氣にて、眼も明ならずと雖も、御兩將の中を直し、天下靜謐に仕るべしとて、敦賀を出で關東へ下向す。石田、大垣へ出張の由を聞き、右兩將和睦相談の爲め、大垣へ立寄る。大谷と石田、若輩の時、衆道の知音にて、親しかりしとなり。石田いふ。某、景勝と內談申合せ、家康を退治の爲めに此城へ出張せり。某方、關東へ下向無用なりといふ。大谷いふ。何とて夫程の大事を、我に談合せざるといふ。石田いふ。其方へは遲く告げ候ても、違義あるまじと思ひ、

先づ脇々の取繕を肝要にしたりといふ。大谷いはく、前方某と内談せば、勝利を得る事あるべきに、最早其方、負くる儀必定なりといふ。石田いはく、味方負くべきにあらず。何もとなくと申合せ置きたり。上方家康方の敵城共を、殘らず攻め落し、四國まで取り續けて、味方の地に致し、秀頼公を守立て、堅固に仕置申付け候はゞ、家康上洛、思も寄らざるべし。扨又、上方へ構はず、奥へ働かれ候はゞ、此方より關東へ切り入るべし。其時、跡を氣遣ひ、江戸へ引入られ候はゞ、味方の強みを見て、一味も多かるべし。景勝切誇り、關東へ切上り申さるべく候間、兩方より押包み、家康を討取らん事、案の内なりといふ。大谷聞いていはく、其分別、某心得ず候。武道の穿鑿は、如何様なる不案内の敵なりとも、功者にして味方の行に、敵の勝つべき重手を打たせ、夫に又、味方の打勝つべき、未然の工夫をすれば、勝利全し。是卽ち彼を知り己を知るの謂れならん。然るに、敵は内府家康公、老功といひ大身といひ、日本に肩を並ぶる者なき名將なるを、淺く見て、味方の能き様に計り申さるゝは、味方の滅亡眼前なり。兼て某と對談ならば、各〻と申合せ、内府瀨田橋を越えらるゝと均しく喰付きて、進退の度を失はせ、取結びたる折節に、諸方一同に蜂起せば、内府、本國は遠し、味方は地戰同前にて、如何様にも軍の行仕能く、味方勝利の武略あるべし。最早、内府を遙々と恙なく、本國へ入れ立てゝの事なれば、此上の智略の思案工夫は、内府の分別次第にて、味方の滅却疑なし。内府の運强き故なり。我等事、病氣にて目は見えず、下鶏の喩に、行がけの駄賃とやらんいふ如くなれば、命をば其方へ與へ、關東へ下るまじといひて、大垣に留りたりとなり。上方凶徒蜂起の儀、關東へ未だ達せざる故、會津御發向として、御先陣江戸中納言秀忠君、七月十九日、江戸御出馬、下野國宇津宮へ御陣をなされ、權現様は、廿一日、江戸御出馬、野州小山に御著陣、同日月三日暮に至りて、上方凶徒の註進ありて、夫より追々、櫛の齒を引く如く註進し奉る故、權現様、執權の老臣を召し、其外、參陣の諸將へ、異見を御尋ね、諸將評議の趣、井伊兵部少輔直政申上ぐる。會津隣國に、最上越後、又は仙臺、其外味方多し。景勝に敵對仕り、喰留め候はゞ、景勝切つて上る事、中々なるまじ。やう〳〵我が地を居しく計りならん。上方には、石田一味多く、西國迄も黨與せば、其内御方の衆も敵となるべし。上方には、太閤厚恩の人多くして、味方に志ある人少し。然れば、會津御退治以後、御上洛なされ候はゞ、其内には上方凶徒はびこるべき間、早速上方の御追討然るべく候。上方さへ御

退治なされ候はゞ、景勝働き出づる事、なり申すまじく候と申上ぐる。權現樣、尤もとの上意、是に因つて、會津抑として、結城宰相秀康卿を大將と爲し、其外歷々差置かる。水戸城主佐竹義宣は、日頃石田と入魂にて、無二の一味なりと雖も、父義重、其砌は隱居にて、竹隈といふ所に居られ候。老功の大將故、末を考へ、權現樣方を引申され候故、義宣も、日和を見て居られ候。義宣の舅多賀谷大夫、上方に贔屓して、權現樣、小山御著陣の時、夜討を仕るべしと、義宣へ申され候へども、返事延引故、多賀谷一己の働危く存じ、遲々仕り候內に、多賀谷內に、歸り、反忠のもの之れあり、其行露見す。權現樣、江戸へ御馬を納れられ、台德院樣は、暫く宇津宮御在陣なり。

凶徒蜂起の事

石田、諸將と兼ねて示合せ置き、權現樣關東御發向以後、島津兵庫頭、七月十五日、大坂を立つて伏見へ寄する。金吾中納言も、廿五日押寄する。伏見城中伊賀衆、松の丸廓より敵を引入るゝ故、同月晦日、總攻の時、金吾先手より火箭を射て、御殿を燒き崩し、其競を以て、八月朔日、終に城を乘取る。城兵殘らず討死、或は燒死す。城將鳥井彥右衞門・松平五左衞門・佐野十右衞門首計り見出して、大坂へ之を差遣す。江州大津城へは、柳川立花飛驒守、其外西國衆の人數相集り、七月二十日より之を攻む。城主京極宰相高次、能く禦ぐ。されども、敵山より鐵炮を放ち、櫓殿守まで打落し、二の丸まで乘取り候故、終に九月十三日に城を渡し、剃髮して高野へ登らるゝなり。

附大津城落去、關原御勝利の二日前なり。殘念といふべきなり。然れども、七月より九月まで、能く持忍へらる。殊に始終、義心を飜されざるは、武道の本意、此忠勤を感じ思食され、後に高野山より召出され、若狹國を御恩賜なり。若狹の前主は、近年小原閑居の長嘯なり。是は金吾黃門の舍弟なり。伏見城に居られけれども、城を逃れ出でられ、若州へ引入る故、御改易ありて、其跡を高次へ下され、其子若狹守は、台德院殿の御壻になされ、高次死去以後、若狹守は出雲國へ所替、廿四萬石下され、若狹守死去以後、嗣なくして迹絕ゆべきの所に、舊功を仰出され、甥を跡目に立てられ、往昔大津の高を以て、播州龍野に於て、六萬石仰付けらる。今の刑部少輔是なり。刑部少輔、若州落胤腹の子なれども、上を憚り、甥と申し

上げて斯くの如し。

勢州阿濃津城は、富田信濃守、關東方にて之を守るを、敵長束大藏大輔、水口の居城には、同名伊賀守を置き、阿濃津へ押寄する。毛利家の吉川侍從・安國寺及び土佐の長曾我部土佐守、四國・中國の人數二萬計り、七月二十日の拂曉より之を攻む。富田、終に之を守る事能はずして、城を開きて去る。

同國松坂城には、古田兵部、手勢許りにて之を守り、七月廿一日、鍋島信濃守寄せて之を攻め勝利を得。

同國岩手山城は、稻葉藏人家來計り籠る。是も其七月廿一日、九鬼大隅守押寄せて、町口まで攻め破ると雖も、籠る所の家來共、堅固に守りて突退くる。

右の外、石田に與し、敵をなす輩は、勢州龜山城に岡本下野守、神戸城に羽柴下總守、桑名城に氏家内膳、海上は九鬼大隅守、尾三兩國の潟浦を燒き拂ふ。長島城には福島正則家來福島掃部頭籠る處を、之を抑へて原隱岐守、太田城に籠る。伊毛井城には、市橋下總守籠るを、之を抑へて高木八郎兵衞、安藝といふに居陣。濃州岐阜城には、織田中納言秀信卿居城なり。其城

の瑞龍寺山に砦を構へ、石田が家臣柏原父子籠る。尾州犬山城には、石河備前守、後宗林と號す、此加勢、稻葉右京亮・同彦六・生熊玄蕃・加藤左衞門佐籠る。皆是れ石田が威に與して、斯くの如し。其外、西國迄も一味の衆、石田に誘はれて、敵の色を立つる。扨又、北國表加越兩國の境目、大聖寺山に山口玄蕃頭父子在城して、石田に與黨せしを、加州羽柴肥前守利長、東國の手合として、尾山城より出陣し、湊川・手取川を越え、三田山に陣して、八月三日、大聖寺へ攻寄する。山口、大剛の將にて、突いて出で、能く防ぐと雖も、無勢なれば、山口父子其外士卒、皆戰死して落城す。利長夫より人數を打入れらるゝ時、加州小松城主丹羽五郎左衞門尉長重、石田方なる故、出向ひ一戰に及び勝利を得、利長の臣長九郎左衞門・山崎長門殿して、漸く備を引退く。

附後に丹羽長重事、利長取持にて、權現樣御赦免を蒙る。利長誠の武士道なり。

凶徒退治として、御先へ諸將發向、其以後、權現樣御出馬、關ヶ原御合戰御勝利、凶徒悉く滅亡の事

凶徒御退治の爲め、御檢使として、井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝、八月朔日、野州小山より罷登られ、諸將何れも、彼の表へ相向ふ。東海道の城主、

一、駿府中村式部少輔　二、遠州懸川山內對馬守　三、同濱松堀尾帶刀

四、三州岡崎田中筑後守　五、同吉田池田三左衞門　六、尾の清洲福島左衞門

此外、太閤家の衆、御方にて罷上らる。（城主衆の樣子に付いて口傳。）右何れも、權現樣御出馬を相待ち候所、御延引、御使として村越茂助御上せに付いて、其樣子の話之あり、微妙なり。

東國よりの諸將、岐阜城を攻めんとて、萩原の渡を越し、西美濃へ押廻る。其先陣は福島左衞門大夫なり。差續に、羽柴越中守・京極侍從・黑田甲斐守・加藤左馬助・藤堂佐渡守・田中筑後守、扨は兩御檢使なり。此手より相圖の烟を見て、河上河田の渡を越す衆は、池田三左衞門・淺野左京大夫・有馬玄蕃頭・松下右兵衞・山內對馬守・堀尾信濃守・一柳監物等なり。敵、木曾川を隔て、岐阜より人數を出したる所に、池田三左衞門、一番に乘越え、之を斬崩し、瑞龍寺の町口まで追討に引返し、圓城（成イ）寺に陣を取る。福島左衞門は、同月廿二日、茜部を越え、岐阜近所に陣を取り、犬山口をば、駿遠二州の衆を以て之を抑へ、廿三日、兩口の衆示合せ、岐阜城を攻むる。城主秀信、人數を出して之を支へらるゝと雖も、味方は倍々の多勢、且つ武功の將衆なる故、終に同日未刻、城を攻め落し、剩へ、秀信を生捕る。瑞龍寺山の砦をも攻め落し、逆徒殘らず之を討取る。石田・小西・金吾黃門、岐阜落城を知らずして、後攻として河田の渡口まで來る所、藤堂佐渡守、何れも先立ちて、一戰を初むる內に、後勢追々に續くを見、爰にて岐阜落城を聞いて、敵、大垣へ引入る。味方勝に乘じて、垂井・關ヶ原・山中邊まで所所放火し、赤坂に至りて陣取り、翌日虛空藏山に附城を構へて、人數を籠むる。爰にて小攻合多し。

岐阜落城の儀、早打を以て江戶へ註進仕る。是に因りて、權現樣、九月朔日、御出馬なさるべしと仰出さるゝを、石川日向守、西塞の日なりと申上げけれども、御猶豫なく御進發遊ばさるゝ事、微妙の名將なり。十一日、淸洲御著、十二日には御逗留、十三日岐阜城に御陣、十四日赤坂に至り御著陣、城へ御座なさる。其日、敵、大垣城より淺賀左馬・稻葉兵部・林半助・伊藤賴母足輕を率ゐ來る。福田繩手（是は西尾豐後守・松下石見守、後に水野日向守を相加へられ、曾根城と敵大垣城との間なり）にて、味方中村彥右衞門手の者と、足輕攻合を初む。中村の家老野一色賴母、足輕を連れ出づる所に、足竝惡しき

凶徒退治として御先へ諸將發向其以後權現樣御出馬關ヶ原御合戰御勝利

を、賴母と知らずして、立堅めんとする所へ、敵突いて懸り、賴母討死する。其時、有馬玄蕃頭内稻次右近、鳥毛の差物を簪して出で、高名して譽を得。權現樣、御陣所の栖樓より御見物なされ、御前に西尾豐後守、其外罷在る中村彦右衞門、我が備色惡く、然も家老の賴母討死する樣子を見及び、某罷向はんと申上げて、座を立ち候所を、達て御留なされ候は、御底意ありてなり。御意を以て、井伊兵部少輔・本多中務大輔行き向ふ。其備武略。口傳。敵を追散らし、勝利を得、手早に味方の備を引揚げて歸る事、弓箭の譽なり。

關原御戰の樣子、敵は、

一に、石田三成、十四日夜半大垣を出で、雪降山〔吹カ〕を後に當て、小關野に備を立て、我が備先に柵を振る。

二に、長束大藏・長曾我部・安國寺・吉川侍從、其外太閤家旗本衆、合せて一萬六千計り、垂井の南岡ヶ鼻といふ山に陣す。

此抑として、味方池田三左衞門・淺野左京大夫及び駿遠衆。

三に、筑前中納言、本陣松尾山より出づる。此相備小川左馬・脇坂中務・木下山城守・同大學・朽木河内守・赤座久兵衞、或は四國衆、彼此玉藤川を越え、石王峠に備を立つる。

御方御備は、

一、左の御先南方は、福島左衞門大夫。

二、右の御先北方は、黑田筑前守。

三、中の御先、右は井伊兵部少輔。左は本多中務大輔。

四、下野守忠吉公は、御先手旗本の如し。口傳。

九月十五日未明、權現樣赤坂御出馬、野上と關原の間、南山に御旗を立てらる。御跡備は、大須賀出羽守・本多縫殿助・本多丹下等なり。其日の巳の刻計り、南の御先福島左衞門大夫、道筋を西に向つて押懸る。敵相懸つて一戰を初むる。福島備の内、先手は家老福島丹波守、其被官團九郎兵衞、一番首徒膚者を討ちての譽なり。味方何れも一戰、就中、井伊兵部少輔、先衆を抽んで浮田と相戰ひ、敵の樣子を見定め、馬を入れ立て、切崩さる。兵部少輔備の内、一の先木俣土佐、二の手鈴木平兵衞なり。木俣手にて、一番に進み出で、母衣武者の能き敵を討つは、尾畑勘兵衞なり。此節は、牢人にて、兵部備を借りて斯くの如し。忠吉公は、島津

凶徒退治として御先へ諸將發向其以後權現樣御出馬關ヶ原御合戰御勝利
凶徒悉く滅亡の事

備を切崩し、御自身乗り入れ、島津家臣威（伊）集院と太刀打し、御高名手疵を被り給ひ、比類なき様子なり。御舅井伊兵部、武功を以て取かひ、兵部も自身の稼に、手疵を被る。本多中書も、自ら手を碎き働き、我が馬を射られ、其外、敵味方相互に入亂れ、粉骨を竭し相戰ふ半に、金吾黄門、敵の裏切を仕らる。相備の脇坂・小川・赤座・朽木も斯くの如し。石田備へ、後より切懸る。就中、島津手へ金吾旗本を以て突いて懸り、島津兵庫頭從弟日向國佐渡原城主島津中務を、金吾内笠原藤左衞門といふ北條家の牢人討取る。右の通故、石田敗軍して、雪吹山をさして逃去るを、味方勝に乘りて、之を追討つ。或は玉藤川へ逃入り、溺死する者際限なし。

附金吾裏切を仕らる其本は、伏見城を攻落す功、第一なれば、其仕置は我なりと存ぜらるゝ所、三成弟石田木工來りて、權を取り候に付いて、黄門思はるゝは、只今さへ斯くの如し。今度勝利を得たりとも、此以後、石田彌、權重く、我々へも下知をすべし。石田下知を請くる我にてはなしと憤り居らるゝ所に、權現樣より御計策なされし故、幸なりと變心せられたりといへり。

島津兵庫殘兵二百計り圓くなりて、味方の備を衝き割り、引退く。味方、之を遮り討たんと欲す。權現樣、之を制止し給ふ。口傳。夫より伊勢地へかゝり、伊賀越をし、大坂へ行きて乘船、無事に歸國す。剛强の大將なり。以後福島取扱ひ、御免を蒙る。南宮表岡が鼻の敵も、悉く敗走す。凱歌の御儀式取行はる。

翌十六日、大垣の城を攻むべきの旨、仰付けらる。水野日向守・西尾豐後守、松尾城より相向ふ。味方何れも差續いて、詰寄せ之を攻め、二の丸まで乘り崩す。城將木村總左衞門・同男傳藏・寛和泉・熊谷内藏允切腹す。相良宮内・高橋左近・秋月長門守は、降を乞うて命を助かる。本丸を預りたる福島右馬助は、城を開渡して、伊賀地へ落行くなり。

佐和山城へは、金吾中納言向はる。御檢使として、田中筑後守加へらる。金吾備の内、先手の家老平岡石見守向ふ。其外にも取寄する城將石田木工頭・同男右近・宇多下野・石田隱岐、何れも申しけるは、關ヶ原味方敗軍の上は、當城、五日十日持堪へても詮なし。多の士卒を殺さんよりは、我々自害せんとて、被官共に暇を取らせ、我が妻子を刺殺し、自殺して名を後代に殘す。被官同心共、志ある者は同じく死せり。其中に、土田東雲といふ者、右の各〻を介錯し、家に火を懸け、其身も腹を切りたり。

凶徒退治として御先へ諸將發向其以後權現樣御出馬關ヶ原御合戦御勝利凶徒悉く滅亡の事

尾州犬山城をも、石河備前守聞きて之を渡す。

右の外、敵城共皆落去。

小西攝津守は、同十七日、雪吹山の東かすがつといふ所に、匿れ居たるを、關ヶ原の林藏主搦取りて、之を差上ぐ。石田治部少輔も、彼の邊山の奥に、樵夫の姿に樣を替へ居たるを、田中兵部尋ね出す。安國寺も太羅尾口より鞍馬寺へ逃行きて後、六條の寺に匿れ居たるを、搦取りて差上ぐる。右生捕の凶徒共、大路を渡して御成敗なり。

毛利輝元、大坂城西丸に居られたる所、九月廿三日、池田三左衞門・福島左衞門大夫・淺野左京大夫・黑田甲斐守・有馬玄蕃頭・藤堂佐渡守等を以て、御請取らせ、輝元、城外へ出でられければ、權現樣、廿九日西丸へ御移なされ候。天下御一統、速切目出たき御事なり。

台德院君は、關ヶ原御合戰に御逢ひなされざる御事は、信州眞田安房守、會津御發向の時、下野國犬伏まで參り、野心を挾み引返し、小縣上田の居城へ楯籠るに依つて、御追討として御馬を寄せられ、御供には本多佐渡守・榊原式部大輔・大久保相模守・酒井右兵衞・日根野筑後守・石川玄蕃頭・仙石越前守及び安房守と、嫡子眞田伊豆守等、三萬八千餘にて御發向、御手間入り上方へ御遲延故、關ヶ原御一戰後御上洛なり。關ヶ原以後眞田安房守、上田城を開き、二男左衞門佐と父子ともに剃髮、黑衣になりて高野山へ登る。嫡男伊豆守を、權現樣へ御奉公に出し置き候を以て、御一命を免されて、斯くの如し。

直江山城守、最上表に於て所々合戰、關ヶ原落去以後兵を納るゝ事

直江山城守一番に、最上領はたやを破り、夫よりひとやが森、或は白岩まで乘取る。左内より下次右衞門を初め、各〻直江と、相圖の如く打つて出で、やち・さがえ兩城を乘崩す。是に依りて、最上出羽守義光、居城山形より、家來志村伊豆守が羽瀨堂の城へ出張す。直江、之を聞きて、羽瀨堂表十町餘北方陣山といふ所へ取詰め陣取る。八月十五日、羽瀨堂邊、放火・芟田の働をして、敵を引き見ん爲めに、先衆の内より二三手差遣す。案の如く城内より、少々人數を出し、一戰を待つ故、味方好む所の幸と、懸りて攻合を初め、敵を追崩す。城内より之を見て、新關備前守といふ老功の士、唯〻一騎乘出し、下知して盛返す。味方二の手を以て立入り、新

闘を初め敵を討取りて、城際まで之を追討つ。然れども、敵は地戦にて、殊に大軍なれば、長追は危き故、手早に引揚ぐる。夫より敵地所々へ、毎日放火・刈田仕ると雖も、敵、之を妨ぐること能はず。

最上の抑として、中山城に、上杉家より中山式部少輔を入置く。又直江家老木村監物父を監物といひ、子を造酒允といふ。此一亂前、父の名監物とあらたむ。二百騎の士大將なり。が、最上領上の山筋より、攻め入り候へと、直江申付くる。上の山城主里見越後をば、様子ありて、最上の旗本へ呼び、其子里見民部に、中山駿河といふ老功の士を、檢使に添へて、上の山の城を持つ。然るに、九月十七日、中山式部・木村監物、中山城には留主居を殘して、兩士大將、東道十五里の上の山へ働き、城をば木村監物之を抑へて手を分け、諸方へ刈田・放火、心の儘に致させ、又中山式部備を押返して、二の見の軍を持つて、木村備を引揚げさせんとする事は、明日又働きて、城を攻め落す歟。さなくば抑を殘し、先へ働くべし。今日は味方草臥れ候とて、斯くの如くなる所に、敵の内坂彌兵衛、此方の人數、足元あがるに目を付、引取る様子かと、何れもに心をつけて、人數の手配して見定むれば、案の如く城を卷解すを見て、城には中山駿河を殘し、里見式部采拜を取りて、四口より突いて出で、切懸る故に、木村の備三町餘引退く。木村監物、側に持たせたる金の制札の差物を取りて、指し、乘廻し、味方を下知し、備を立堅めんとする時、不慮に深田に馬を乘入れ、馬のたけもはづるゝ程なる所なり。轡を引上げんとすれば、面いきれて進退ならざる時に、敵坂與兵衛來りて、木村を槍付け、終に首を取る。木村勢彌〻敗軍の所に、中山式部、備を三手に作り、一手は城へ懸け、一手は追ひ來る敵へ突懸り、一手は其二の見を持ち、貝太鼓を合せて靜に懸る。敵、之を見て、早々城内へ引入るを、之を追ふ内に、木村衆も備を立直し、式部後へ詰めて懸り、附入にすべき所に、中山駿河、下知して逃入り、味方を立直し、門を堅めて相守り防ぎ候故、附入ること能はず。されども、差出されたる人數、殘らず討取る。雜兵合せて二百餘級なり。味方も百六七十計り討死。就中木村監物も討死す。

直江山城守、陣山に居て、ひかんねを初め、諸方へ手遣ひ、夜討小攻合して、後を取らず。然る所に、九月廿四日、羽瀬堂邊へ、放火・刈田の爲め、人數遣す時、味方の若者、或は手明の者共、羽瀬堂へ取寄せて、外曲輪を攻破り、利を得て歸る時、城より志村伊豆守、人數を出して喰ひ留むる。味方の若者共、取つて返して戰はんとすれば、敵引取る。味方引揚ぐれば、又

直江山城守最上表に於て所々合戰闘ヶ原落去以後兵を納るゝ事

喰付きて引取らせず。此様子を、直江、陣山より見ていはく、放火計りの働をばせずして、下知なきに城へ取懸り、剩へ斯くの如きは、惡き若者共かなとて腹立し、誰をか遣し、引揚げさせんといふを、上泉主水望みて出向ふを、大高七右衞門、上泉を抑へて、某罷向ひ、引兼ね候はゞ、重ねて御越し候へとて乘り出す。上泉、左様に候て、時節相延び候はゞ、敵又人數を加へ、味方勝利を失ひては如何とて、同じく續いて乘出し、唯二騎行向ひて乘廻し、味方を下知し、備を立堅め、味方の間を二返乘りて、繰引にする。上泉、例の阿彌陀の御光金の前立物、朝日に輝く。上泉なりと、敵見て之を知り、恐れて喰付かずして、弓鐵炮を放つ。漸く城際四町計り引揚ぐる時、上泉、鐵炮に當り、馬より顚に打落さるゝ。敵見て、又競ひ懸つて、主水が首をば、里見越後が被官金原加兵衞之を取る。（此金原加兵衞、最上殿御改易以後、永井右近殿へ仕ふ。）味方若手の者なれども、越後家の作法に馴れ候故、人々相嗜み、備を崩さず、入り替つて一手切に切懸り、二の手の備を待請けて、引揚げては亦備へ、行列の作法相定るを以て、敵を追退け、難なく人數を引揚げて歸るなり。

直江山城守、羽瀨堂をば抑へ置き、山形へ取寄すべく、最上義光出張の羽瀨堂をさへ、味方の若者小勢にて、外曲輪迄攻破る程なれば、山形にも手間取るまじと、味方と評議の所に、景勝公より、山城守方へ陰狀を下さるゝは、去る十五日、濃州關ヶ原に於て、石田敗軍し、生捕らるゝの由、透波共、追々會津へ註進す。然れば、家康、近日又會津表へ發向あるべきの條、最上表を引拂ひ、歸陣致し候へとの儀なり。最上へは、猶以て事廣く註進故、是に力を得、味方には隱すと雖も、敵方より呼びて知らするなり。直江いはく、石田滅亡に付いて敵は競ひ、味方は弱る事眼前なり。唯今まで、木村・上泉討死すと雖も、敵と戰ふに利を失はず、敵城五つまで乘取り、近々羽瀨堂を初め、山形までも攻破るべしと存念の所、此註進を聞くや否や、何事なく引取りては、今迄の働、無になり、味方力を落し、敵、氣に乘ずべし。今一度、羽瀨堂へ押寄せ、手強く弓箭を取りてこそ、武道の本意なれといひて、同廿九日早旦、陣山より備を出し、羽瀨堂へ相働き、弓鐵炮を以て、城を抑へ置きて、城下の在家を初め、近邊悉く燒立て、然もねごやの曲輪二構迄踏破りて燒捨て、討取りたる敵の首百餘、右の場に懸け竝べ、日暮に及ぶ故、人數を引揚ぐる。山形より後攻の人數出づると雖も、洲川を越えて、這方へ働く事ならず候。

直江山城守最上表に於て所々合戰關ヶ原落去以後兵を納るゝ事

附ねごや一番乗は、相模浪人山口軍兵衛といふ武功の士なり。以後、會津を浪人して、最上へ來り居る。

直江、陣山迄引入りて後、山形衆、羽瀬堂或は門でん村迄、追々に人數を出し、羽瀬堂衆も打交りて詰懸る事は、直江引取るべき間、跡より討慕ふべしとて斯くの如し。直江、十月朔日巳の刻、如何にも靜に、陣山を引拂ひ、洲川を右に當て、北の方へ押出し、半道程引揚げ候時、今度直江、最上へ働くに付いて、義光より嫡男修理亮を以て、伊達正宗へ加勢を乞はるゝにより、仙臺より正宗伯父伊達上野介・尾出薩摩守兩將、合せて二百騎來る。此手を合せて、八百餘騎跡を慕ふ。味方、兼ねて覺悟の事なれば、返合せて之を禦ぐ。上杉家、種ヶ島の鐵炮無類の上手高濱彈正右衞門に、稽古仕りたる足輕吉田印齋が的傳弓の射手山口軍兵衛に指南を請けたる足輕、或は若者の内より、器量を選出で、殿り備に組合せ、敵を射立て打立てする内に、敵方にて、會津衆は、大筒を膝臺にて打つと沙汰して恐れたるに、斯くの如くなる故、之を見て進まざる所を見合せ、敵の右の手より突いて懸る。敵も精を入れ挑み戰ふ。仔細は、仙臺衆は加勢に來る程にて、地衆に越えらるゝは、無念なりと勵む。地衆は他處衆に越されては恥なりと思立ち、强みの爭ひ計りにて、勝利の至極の所之れなく一致せず、備むらむらなるを、味方之を積りて、直江旗本より貝太鼓を以て盛返し、敵の左へ押廻して切懸る故、最上勢、直江方へ向ひ候へば、旗色悪く惡くなると等しく、味方殿の衆は、勝色になり競ひ懸り、突いて押込み候に付いて、敵敗軍仕るを、門でん村迄追討ち、競の聲を揚げて、本の場所へ引返し、首帳を認め、實檢して凱歌を執行ふなり。味方各〻武頭・物奉行、直江へ申すは、此競には、敵突いて懸る事、思ひも寄るまじく候へば、直に引取り給へといふ。直江返答に、今日中に引取りては、只今までの勝利、無になるなり。敵地にても味方地にても、人數生死の多少には限らず、芝居を踏まへたるを以て、勝と定むる事、昔よりの吟味なり。況んや石田滅亡に付いて、當表を引取り、某落著かざる作法ありては、憶病神が付いて斯くの如しなどと、世間の唱あらば、惡名は、屋形樣の御弓箭をも穢す事なりといひて、其日は逗留し、翌二日巳の刻迄、備を設け、夫より、はたや迄引退きて陣取なり。此時、前田賢次手に乗りて、小殿を仕り候へども、敵、重ねて突いて出づる事ならず。然れば、はたやより下長井へ懸り、恙なく會津若松に至りて、備を打入れ、直江山城守武道の譽、世に高き事、件の如し。

附其時の最上の太守出羽守義光嫡子修理亮は、後逆意ありて、庄内に於て殺され、二男駿河

直江山城守最上表に於て所々合戰關ヶ原落去以後兵を納るゝ事

守家親家督を續ぎ、家親不祿の後、源五郎家信の代になり、家老我が意地の公事に依りて、最上を召上げられ、一萬石下され、家信の嫡子は、今の刑部義智、五千石之を領せらる。直江歸陣の砌、最上領やちの城に、下次右衞門を殘し置きて、其邊の仕置申付候所、石田滅亡なれば、行末、上杉家頼なしと思ひ、最上へ從ひ、最上衆を庄内へ引入れ、切取らするなり。然れば、直江さへ、會津へ呼返さるゝ程なれば、庄内に差置かるゝ城持衆も、留守居少々殘して、皆會津へ召寄せられたれば、やす〳〵と何の手間取る事なく、庄内三郡、最上義光の手に入るなり。此次右衞門は、謙信公の下男なりしを、御眼力を以て御取立て、騎馬の列になされ、御さげすみの如く、數度武功を顯すに依り、次第に立身仕る。此者、隱なき算勘の上手なり。景勝公御代、四人御領分、勘定奉行下次右衞門は庄内、川村彦左衞門は佐渡國、窪田源右衞門は信州川中島、山田喜右衞門は越後〔國イ〕御旗本に罷在り。其樣子御仕置の作法、口傳、武道の助なり。今度、最上へ直江相働く節、やち・寒川江兩城を、左内より各〻出でて乘取る事、此下次右衞門分別宜しき故なり。武道はよしと雖も、元來下臈なる故、義理を知らざるを以て逆心仕る。然れば、其本は直江、やちの城に、次右衞門を殘し置きたる故なれば、直江誤と見る事正道なり。

斯樣の事にて、氣を付けて思案工夫すべし。武道は、義理を專とし、纔の武功ありとも、義理の少き者は、至つて憶病疑なし。次右衞門、若年より武譽ありて、此度も功ありと雖も、御兩代の御厚恩を忘れて、逆心仕るは、士にかけたる大憶病者と批判して、其名を唱へば、口をすぐべし。されども、少しの事を以て、人を捨て候はゞ、萬々疎漏たる者はあるまじ。人に事を闕くべしと、不審もあるべけれども、そこそこ大將一心の采拜なれ。其使ひ樣にて、大惡の盗人も、却つて重寶なさるゝ事もあり。之を良將は士を弃てずといふ。下次右衞門も、使ひ樣宜しければ、譽もありたるに、やちの城に殘したるは、使樣惡しき故逆心仕るなり。又恩を得奉る主君へ、逆心仕る者は、其身一代は、安穩なりとも、子孫に及んで天罰遁れ難しと思ふべきなり。下次右衞門、逆心の忠に依つて、大山城（むかしのおうら）に差置かれ、一萬三千石の領知を給はりて、其子の次右衞門代迄、斯くの如き所に、最上の家中に、一栗兵部といふ小身者、遺恨あり。或時、庄内龜ヶ崎の城主志村九郎兵衞と、下次右衞門同道して、新關因幡と申す者の所へ振舞に行く。彼の一栗、我が屋敷の前へ出向ひて、次右衞門を、手もなく切殺す。次右衞門子もなき故に、跡絶え候事、是非天罰なるかな。右の時、一栗兵部、我が家來に申聞

直江山城守最上表に於て所々合戰關ヶ原落去以後兵を納るゝ事

け候は、彼の兩人を、某一人にて放討に討濟し候はゞ、兩人の跡を、某に下さるべしと、上より仰付けられ候。何れも精を出し候へと申す故、下々迄もいさみを含み、主と共に切懸り働くなり。一栗は、僅千石計りの身上なり。兩人は大身なれば、手をよごさずに、斬殺さるべきにあらず候へども、唯是れ天罰なりと、存ずべき定義なり。一栗は兩人を斬殺し、我が家へ引籠り、家に火を懸けて切腹仕り、内の者共は切死仕るなり。

權現樣、藤田能登守を召出され、景勝公と御和睦の事

直江山城守は、最上より歸陣、其外御他國の人數を、會津へ召集められ、權現樣御發向を相待たる。權現樣伏見御在城の内、藤田源心方へ、上使として阿部善九郎・秋元越中守を、大德寺へ下され、下野國那須に於て、十萬石下さるべき間、罷出づべしとの御事なり。藤田申すは、前方に候はゞ、此儀申すまじく候へども、景勝逆心露顯仕り候間、物語仕り候。私事、景勝に對し、聊か別心を存ぜず候へども、直江山城守、某を別心と申立て候。其樣子は、斯くの如くに候と、會津を立退き候趣、委しく御使へ語り、斯樣の儀にて候へば、行々は是非上杉家へ、歸參の覺悟にて御座候。然る間、御下へは罷出で候事、なるまじく候と御請申上ぐる。猶數度、御使の上、又右の御兩使に本多佐渡守を差添へ、仰下され候は、景勝とは、兎角此方より無事を入れ、仰談ぜられずして叶はぬ事なり。其樣子、藤田罷出で申上げ候はゞ、兎も角も、景勝分別相應の取組なさるべく候。左候て、景勝と御無事相調ひ候はゞ、藤田心底誤なき段、權現樣より、景勝へ仰開かれ下さるべく候。左あれば、藤田一身の忠義は相立ち候。藤田罷出で ず候へば、御無事の取組其首尾、此方より仰遣され、景勝氣に入らず、承引之れなくば、再び騷亂となり、景勝滅亡に候はゞ、藤田今までの義理合も水になり、景勝へ不忠といひ、殊に天下の災、藤田分別仕る返答尤なりと仰下され候故、遁れ難く罷出で候。然れば御無事の御内談ありて、會津への御使、秋元越中守仰付けらる。其仔細は、武州深谷上杉家三宿老は、井草・秋元・岡庭とて其一人なり。小田原御陣の時、主人上杉と同じく、父の秋元も、小田原に籠り候へども、其子の越中守（但馬守父）は、權現樣召出され候。元來上杉被官筋なり。同深谷士大沼越後といふ武功辯舌達したる人を差添へられ、妙心寺・覺光寺も下向あつて、御無事取繕あり。御互に種々の仰せられ樣ありて、切々御使衆、御雙方より往返、終に御無事調ひ、翌年霜月、景勝

公、江戸へ御越し、權現樣、御禮儀正しく御對面相濟み、其後景勝公御登城、權現樣御直に仰せらるゝは、其方別心の驗に、公儀への仕付の爲めに候間、米澤へ移られ、只今まで直江山城守が領知三十萬石を、御手前領知あるべし。山城には五萬石、其外に遣し置き申すべく候。連連は、本領相違なく返し進じ申すべしと仰せらる。景勝公御返答に、江戸へ參り候上は、如何樣にも、御意次第に候とある故、景勝公、米澤へ御移なり。其跡會津若松へは、蒲生秀行、宇津宮より所替六十萬石になされ遣さる。秀行は權現樣御壻なり。

附秀行御子息下野守忠郷相續、會津相違なく領知、早世して嗣なき故、舍弟中務大輔忠知、豫州松山に於て、廿四萬石下され所替、是亦早世。男子なくして、蒲生家斷絶。女子一人あり。是も死去なり。

權現樣、景勝御無事相濟み候故、藤田能登守、本多佐渡守を賴み、御訴訟申上ぐるは、某を召出され候時の上意の如く、上杉家へ、歸參仰付けられ下され候へと申す。卽ち佐渡守、披露して申上げ候へば、御城へ藤田を召され、上意に、當時天下の掟の爲めに、景勝を小身に申付け候へども、やがて以前の如く安堵をなすべき間、其時歸參尤もなり。其內、堪忍分として、下野國西方にて一萬三千石、幷に內方化粧料として二千石、合せて一萬五千石下置かる。又上意に、上杉家へ歸參の儀、存じ留り候はゞ、前廉仰出されたる如く、那須に於て、十萬石下さるべしとの御事なり。藤田申上ぐるは、景勝、小身にても苦しからず候。私も其相應に罷在るべく候。歸參仕り候へば、本望にて御座候と申上ぐる。江戸にて景勝登城の節、藤田を召出され、御引合せなされ、藤田內心の通、如何にも詳に景勝へ、權現樣御物語遊ばされ候。夫より景勝公、御心底解け、藤田へ御懇なり。權現樣、重ねて又仰聞けられ候は、景勝へ段々申達し、藤田心中の義理は、相濟み候なり。さあれば、上杉家へ歸參達せざる事なり。景勝小身なれば、相應程知行與へらるゝ事なるまじ。以來景勝を、大身に申付けての上に歸參然るべしと、御直に上意にて、御留めなされ候。

附景勝へ、本領御返しなされず、其內、藤田堪忍分にて差置かせられ候故、十萬石下されず、上杉家へ歸參も仕り得ず、剩へ、大坂御陣以後、御料を蒙り候。

夏目舍人の事

權現樣藤田能登守を召出され景勝公と御和睦の事

舍人事、右に記す如く、上泉主水方より呼び候へども參らず、小國但馬方に忍び居り候内、藤田能登守、會津を浪人せらる。此上は是非なく、先手衆何の備へなりとも附くべしと、但州を頼み候へば、兄の直江山城を以て、景勝公へ相達し候へば、早速御前へ召出され、御引出物など下され候。頓て役儀仰付けられ候は、御前備二備の士大將は、右の方長尾伊賀守百五十騎、左の方は水原常陸介百五十騎、合せて三百騎なり。右伊賀守百五十騎を三手に分たる。其作法は、

一に、五十騎、此頭は志水隼人、外二騎は小頭なり。

二に、五十騎、此頭は夏目舍人助仰付けられ候に付いて、廿五騎宛二手に分けて陰陽とする故、舍人下にて二騎の小頭は、吉田久右衞門（此久右衞門、城平隱岐守殿に奉公、後上州豫州松山に近年まで罷在り候）・尻高民部（後上州沼田へ引込み、五ヶ年前酉二月死す）兩人なり、役者を引いて五十騎なり。

三に、五十騎、伊賀守手前の騎馬を合せて、七十五騎なれども、役者を引く五十騎の備と定む。

水原常陸介備も、大方斯くの如し。然れば前備二備なれども、六手々々又十二手となる。是に付きて口傳あり。然る故、夏目舍人歸參仕り候へども、御前備に罷在り候故、最上へも參らず。尤も關ヶ原の儀は存せず、會津に居り候。權現樣景勝公御無事故、舍人助、又會津を引拂ひ、上州のにう原或は關根邊に、年月を送り罷在り候。然るを、厩橋城主平岩主計殿聞出され、召抱へたしとて、前畠領一跡を殘らず給ふべき間、罷出で候へとて、家老平岩九左衞門並に甲州牢人水澤左門・相模牢人石關兵庫を差添へ、舍人方へ差越さる。舍人申すは、越後に於て、前畠領より多く所知仕り、殊に五十騎の組頭仕り候間、少しも立身にて之れなくば、罷出づまじと返答す。又重ねて、右の三人を差越され、連々は兎も角も候へ。先づ當分は、牢人と思ひ、我等下に堪忍して呉れられ候へと申越さる。舍人申すは、初より其御斷にて候はば、今程某身上、逼迫の體にて候間、罷出づべく候へども、一度知行の員數を承り、夫を此方よりねぎり、樣子よき樣に取繕ひ候事は、越後家風にての嫌者にて、其味惡しく候間、ふつと罷出づる事、なるまじと申切り候へば、石關兵庫申すは、其方は、口廣き事を申され候。今まで何程の事を致し、左樣に身を亢られ候や。我等などは、小城といひながら、上野米津に寄居を持ち、北條家にて名を呼ばれたる者にて候へども、只今の時節なれば、其方よりは小身にて

も罷在り、明日に何事ありても、其方などに仕負くべしとは、思も寄らず候と申し、舍人いひ分を、事の破として石關に向ひていふ。流石石關殿とも覺えぬ物の申され樣かな。其方不甲斐なき故、其つらにて居ながら、米野の城主と名乘り、却りて米野の寄居に、疵を付くる事なれば、隱密あるべき儀を自慢して、詞に出ず心立にては、明日というて、先を考へての事もなければ、善惡知らず、只今我等と切り合ひてなりとも見候へ。其方などを切殺すといふは、物に似て扣き殺すべしと申す。右の兩人、其外其座へ參り合せたる各〻抑へ沈め、中を直し候。石關中を直るまじと申す。舍人方より和を入れ、中を直し候故、各〻石關を連れて歸り、右の舍人返事を、平岩殿へ申したる由に候。さて其日、石關所へ、舍人方より狀を付け候は、はつ崎の北の寄居の跡へ出合され候へ。あれにて晝の申分の埒を明くべしと申遣し、舍人先達て、右の所へ出で相待ち候へば、其日暮前に、石關さすがにて、只一人出づる。舍人出で向ひ、石關奇特に參りたり。今晝、互の遺恨をば爰にて散ずべし。先づ其方刀を拔けと詞を懸け候へば、石關卽ち刀を拔きて、世悴め推參なりといひて、蹈込みて切る所を、舍人、刀を拔き出して、柄にて請くるを、鍔を斬割り、舍人が右の方の頭を切りそぐ所を、舍人飛入りて蹈倒し、刀を拔き、峯打に續け打つて、石關が頭をたゝき割り候。慶長七年壬寅六月二十日の曉なり。其場所は、上野白井と厩橋との間、八ツ崎の寄居、其頃今八ツ崎と云ふ。口論の時、石關を扣き殺すべしと申候故、扣き殺し候樣子、御目に懸けん爲めに、とゞめをも刺さず候と、前方書付懷中し、竹に夾立て置き、歸りて妻子を召連れ、刀禰川の向漆原へ懸り、北上野の中里見へ參り、其所の地頭里見右衞門佐殿、其時は喜兵衞殿と申すへ、頼入れ候へば、室田の長念寺の向、上里見に名を替へさせて、隱し置かれ候。

附此里見右衞門佐、一年關東を牢人し、舍人助を頼み、越後へ參られ候故、舍人介抱致し、藤田に引合はす。其後、藤田申上げ、景勝公へ召出され候。權現樣、關東御入國の御時、景勝公へ右衞門佐被爲義、淺野彈正殿迄、右衞門佐本意の願を頼み遣し申されし故、權現樣、彈正殿より申上げらるゝを以て、右衞門佐に、上野の內、上里見・中里見・下里見を下され候。井伊兵部少輔殿、高崎拜領ありて、權現樣より右衞門佐を、兵部殿へ御預けなされ候。關ヶ原落去、兵部殿、江州佐和山へ所替の時、右衞門佐も、佐和山へ御同道なり。關ヶ原一戰の砌、兵部殿備先にて天晴なる働の仕事其隱なし。右の通、舍人助好身（よしみ）あるを以て參り候なり。右の石關兵庫、幼少の子、之ある由に候へども、某は存ぜず候。石關弟一人之あり候へども、自身、舍

人を討つ事なるまじと思ひ、高橋次郎左衛門抔といふあばれ者を、金子三十兩にて賴み候。此次郎左衛門、元來舍人被官筋の者なる故、舍人に告げ知らせ候。左樣に身をかばひ申す憶病者ならば、舍人助餘り氣遣も仕らず候。案の如く討つ事ならず候。此儀を面目ながり、名字を替へ、尾州大納言殿へ出で、頃年迄生存疑なし。

上野白井城主本多豐後守殿（先年三州岡崎在城本多伊勢守忠利の父なり）より、後藤庄兵衛・竹内三右衛門を以て、吾妻と白井の境五町田領の一跡給ふべしと仰せられ候へども、是へも樣子之ありて罷出でず候。其後、平岩主計殿を甲州へ遣され、其跡厩橋を、酒井雅樂頭殿拜領ありて、柴田左衛門・石川太郎兵衛兩使を以て、舍人方へ仰越され候は、永々の牢人と聞及び候。我等所へ、牢人分にて參られ候へ。其方武功の譽の樣子、連々上聞に達し、何卒御旗本へ出し申すべく候と、種々御懇淺からず候故、忝く存じ、雅樂頭殿へ罷出で候事、慶長九年辰二月の末なり。然る所、江戸御城石垣御普請、雅樂頭殿請取の場所小奉行二人は、植野作右衛門・太田三右衛門、其大奉行に、夏目舍人罷出で候へと申付けられ候。事の樣子次第、權現樣へ先づ御目見仕らせ候はんとの内證を以て、斯くの如し。其時、藤田能登守、雅樂頭殿御普請組にて、或時、御普請場にて、舍人を見付け、其明日、雅樂頭殿へ藤田申さるゝは、舍人助事、某深く構之ある者にて候。御扶持を放され下さるべく候。左なくば、御所樣へ、直訴申上げ候てなりとも、某存分に仕り申すべしと申され候故、雅樂頭殿をも立退き候事、同年九月二十日なり。又厩橋領關根へ引籠り居候へば、其儀を藤田聞かれ、最前は增毛但馬に申付けられ、後には大淵喜右衛門といふ鉢形より藤田所へ歸參武功の士あり。此喜右衛門承りて、黃金五十兩宛、舍人方へは沙汰なく、内方へ合力と事寄せて、送越し候。

附　此大淵喜右衛門事、西方滅亡の後、本多上野介殿へ出で、五十人の足輕大將仕る。上野殿御改易ありて後、永井右近殿へ呼出さる。只今の大淵角之允重賀父なり。

予定房、正保三年丙戌、尙政公に從ひ奉り、江戸へ下り、慶安元年戊子の春まで、在府の内、久しく相煩ひ候。父母心許なく思ふべしとて、之を隱すと雖も、漏聞き、山州淀より度々使を下しぬ。其後、老母蓮珠院英室妙香より、文はなくて、一つの卷物を給ふ。開きて見れば、誡の歌なり。誠に孟母の斷機の訓ぞと思ひて、卽ち閨壁に張り、南容が白圭の如く、日に三度詠吟す。然れども、堯も其子を化すること能はず、舜も其父を諫むること能はず、周公も其兄

を教ふるを得ずとやらん。予本より愚なれば、口に唱へても、其行迹其理に當らざれば、慈母の教誡も、皆無になり、淺ましき事に覺え候。殊更、和歌の道は、曾つて辨へざれば、教の志も明ならずと雖も、一方の理に似たる古語を、歌の下に書加へて、心の樂とし侍るなり。

花は、春のさかりをながめ、月は、秋のくまなきを見て、心をちゞにくだきても、なぐさむ世の人こそうらやましけれ。わが身ひとつのやうに、老の名たてがほなれど、目さへかすみて、さだかに見えねば、なぐさむかたもなし。しかのみならず、かなしきものにしける君さへ、みやづかへさりがたくて、あづまにくだりし事をなげきしに、こゝちそこねけるよし、いひおこせければ、やみにあらぬおやの心も、くれまどひて、いよ〳〵見まくほしきなげきのやるかたなきも、なぐさむやと、すゞりにむかひ、いろはのもじを、句の上に一字づゝおきて、なにはのよしあしのこと葉をも、わかぬもしほ草のたねと、子をおもふこころをしるしつるなり。

いくちとせふらぬものからおやごころ　慈母手中縷、
あかずもいのる子のよはひかな　遊子身上衣。

ろなりしもさだめなき世といひながら　恩則親養父母、
おやしまもらば又もあひみん　義則上下相憐。
はかなさはいのちなりとてわが君に　死生有レ命、
つかふるみちにをしみばしすな　富貴在レ天。
にたるこそ友とはなるぞ人ぞみな　里仁爲レ美、擇不レ處焉仁得レ知。
なれゆく中にこゝろあらなん　繫念乖レ眞昏沈不レ好レ學、神何用二疎親一。
ほとけかみいのらずとてもわが君に　君子接如レ水、
つかふる身しもみちにかなはゞ　小人接如レ醴。
へだてなき友にもなをも心せよ　人世堅約手翻覆、
こやものゝふの道とこそきけ　君看庭前松栢姿。
ときの間に人のこゝろはかはるぞと　和二其光一、
おもひゆるすなものゝふの道
ちりの世にまじはりぬればちはやふる

夏目舍人の事

神も光ののどかなりける
理非をよくわけてし見ればてる月を
かくせる雲もあらぬ世のなか
ぬす人は心つよくは入りもせじ
かどのまもりはよしよわくとも
流通する事をかたるとなをも聞け
よくしるみちもかはる世の中
起臥にのちの名こそはおもほゆれ
かりのうき世のたのしきは何
わが身さへなほまゝならぬ浮世ぞと
おもひかへして人をうらむな
かずならぬ人にはなをぞ心あれ
めぐむならひぞ神も佛も

同二其塵一。
自性照レ内、
三毒自除。
荀子之不レ欲、
雖レ賞レ之不レ竊。
改レ過必生二智惠一、
護レ短必内非レ賢。
夢幻空花何學二把捉一、
得失是非一時放却。
但向二心中一除二罪緣一、
各自性中眞懺悔。
讓二尊卑一和睦、
忍二衆惡無一喧。

よの中にはちをすゝげど濁江の
すみがたきよとかねてしらなん
たれもしるみつればかくと夕月の
あまつをしへの道をそむくな
連々につもればちりも山となる
ことをおもひてものまなびせよ
それとなくこゝろをつくせ武士の
おもひありとてみちをみだるな
つみとがのむくいはのちの世々ならず
はやくこの世にありとしらなん
ねにふして寅にはおくる露の身も
きえてのゝちの名をおもふゆゑ
なにごともさだめなき世とさだむれば

夏目舍人の事

有二我罪一卽生、
亡レ功福無レ比。
眞如自性是眞佛、
邪見三毒是魔王。
君子以レ文會レ友、
以レ友輔レ仁。
主二忠信一、
無レ友二不レ如レ己者一。
邪迷之時魔在レ舍、
正見之時佛在レ堂。
風與夜寐、
禮之制也。
正見自除二三毒心一、

おろかなる身もまよはざりけり
らくはらくうきはたのしきはじめぞと
時にあふ身をうらやみなせそ
むつまじき君が名たてそ一すぢに
つかふる道にこゝろつくして
うづもるゝ名をなげくなよ山櫻
花さく春のおりもまたずて
いつはりをこゝろのうちに思ふなよ
まだきたつ名のならひある世に
のがるべきみちしなければ兼ねてより
なき身としりておどろくなきみ
おもしろきほどもあらしに散る花の
いろに心をうつさずもがな

魔變成レ佛眞無レ瑕。
若眞修レ道人、
不レ見二世間過一。
事レ君軍旅不レ避レ難、
朝廷不レ辭レ賤。
人不レ知而不レ慍、
不二亦君子一乎。
小人閒居爲二不善一無レ所レ不レ至。
見二君子一而後厭然、揜二其不善一而著二其善一。
五陰浮雲空去來、
三毒水泡虛出沒。
纔有二是非一、
紛然失レ心。

くもの上のすみかなりともうらやむな
はにふの小やもたゞ心から
やまずのみ心をつくしあしがきの
ひまなく君につかふるぞよき
まだきより君がこゝろにそむくなよ
つかへの道は身をおもふため
けふごとにまづものゝふの道をせよ
ほかのまなびはひまの餘りに
ふかゝれやくみ見て人のしらぬまで
心の水のそこもにごらず
言の葉に人のこゝろはしら絲の
くりかへしてもおもふべきかな
えやはいふいへばつみうる世の中に

李郭先生妻曰、今結レ駟
列レ騎、所レ安不レ過レ容レ膝。
水鳥緩々似二閒暇一、
其足閙々無二止時一。
子曰、民以レ君爲レ心、
君以レ民爲レ體。
行有二餘力一、
則以學レ文。
莫レ見二乎隱一莫レ顯二乎
微一、故君子愼二其獨一也。
九思
一言。
詩曰、無言不レ讐、

人はわが身によしあしくとも
手にむすぶ水にあとなく忘るなよ
文と弓とをつねにならひて
あきらけきかゞみにかけて見し事も
しらぬがほにしする人ぞよき
さかづきをくみなかさねそ武士の
八十氏人もこゝろみだるな
きよみがた關守る人のなきやどは
おもひよりてもとはですぎなん
ゆくさきもわがすむやどは明くれに
人にはあだのありとしらなん
めにちかく心よわきをみるとても
人をなすてそものゝふのみち

無レ德不レ報。
左レ文右レ武、
如二鳥羽翼一。
鏡裏看レ形見レ不レ離、
水月捉レ月爭拈得。
惟酒無レ量、
不レ及レ亂。
禮曰、朋友之交、主人不
レ在、不二大故一則不レ入二其門一。
詩曰、戰々兢々如レ臨二
深淵一如レ履二薄氷一。
詩曰、溫々恭人
維德之基。

身を三たびあさな〳〵にかへりみて
こゝろひとつによしあしをしれ
しばらくもわすれず思へをとこ山
あふぐにまもるものゝふの道
ゑふの身はさだめがたきぞよき人の
よきとよくみし友に問はなん
ひとのうへあしきもよきも人問はゞ
あしきはいはでよきはこたへよ
ものごとになれぬる人にちかづきて
とひつゝ後におもひさだめよ
せはふちになれるためしを靜なる
みよをわするなものゝふのみち
過ぎぬるはおよばぬことぞ武士の

曾子曰、吾日
三省二吾身一。
質二諸鬼神一而無
レ疑知レ天也。
舜好レ問而
好察二邇言一。
隱レ惡而揚レ善、執二
其兩端一用二其中一。
曾子曰、以レ能問二於
不能一、以レ多問二於寡一。
君子者常畏懼
而不二敢失一。
過猶不レ及。

みちにばかりも心盡しそ

正保四年九月十三日　蓮珠院妙香

なつめぐんはちどのへ

定房の許よりいひおこせけるは、さなきだに、おろかなる母の子をおもふ心のやみに、まよひぬることの、はゝ君ならで誰にかとなん、へだてなきとしごろの心も、あらはれぬることさへ、うれしくて見侍るに、聖教にひとしきことどもなれば、賢女といふとも、およぶべきものにあらぬをかしきふしぶしおほければ、世の人にもしらせまほしくぞ。かゝるうたは、男のにはきこゆれど、女のには是やはじめならんかし。

はゝそ原木のもと照すいろはたゝ人のことばのもみぢなりけり

慶安二年九月廿五日　小野山人蹈雪

此小野山人蹈雪は、姓は藤原より出で、賤しからぬ人なり。世の塵をいとひ、小野邊清き流に心を澄し、晝は終日、三教の文に眼をさらし、夜は終夜、和歌の道に心を寄せられしに、一入其道に長じ、世の人あまねく唱ふ。幸に予年來の友なれば、愚母が卷物を見せ侍りしに、よあししの詞はなくて、紙の奥に筆を加へて返さるゝなり。

新安手簡附錄、白石與二土肥源四郎一の書にいふ、上杉記の事、昨日も申上げ候通、珍書にて、殊に御副本の爲めに、拜領の物に候間、我等方寶書の中にて候云々。

時享和改元の春、白石の孫新井某に私請し、謄二寫之一收二于帳中一。

知約堂主人誌

大正五年九月廿二日印刷
大正五年九月廿五日發行

【越後史集　地】
【定價金壹圓五拾錢】

編者　黑川眞道

發行者　小瀧淳
本郷區駒込林町一八三番地

印刷者　楢山定吉
神田區三崎町三丁目一番地

印刷所　友文社
神田區三崎町三丁目一番地

不許複製

發行所　東京市本郷區駒込林町百八十三番地
振替貯金口座東京二七〇二四番　國史研究會

ЗЛ9Т25